

サンデン・フォレスト
全域植物モニタリング
調査報告書

平成26（2014）年10月

里見哲夫・吉田龍司・神宮

1・調査の目的

サンデンフォレストは、自然環境と企業の共存を目指した近自然工法が、各所に導入を試みて今日を迎えている。この工場敷地内には残存緑地、造成森林、造成地等が整備され、特に造成域には近自然工法が導入されての植栽が実施されてきた。工場建設が開始され操業よりすでに 20 年余が経過している。その間に植物は生育をみて、植生にもいろいろな面での変化が生じている。ここに「サンデンフォレスト自然系モニタリング調査」平成 23・24 年度報告書（以下、報告書とする）の内容を精査し、生物共存のよりよい環境が継続されることを目的に実態を調査検証し、目的達成に努力することを目指して検討した。

2・調査

調査は 2013 年 10 月に 3 回、2014 年 4 月～9 月まで、4 月～6 月に 2 回、7 月～9 月に 1 回ずつの計 10 回を実施した。

3・調査場所

「報告書」では調査範囲が全域としてあるが、工場内の残存緑地、東西の調整池、造成森林、造成地、造成庭園、駐車場等の空き地等も調査の必要さがあると感じ調査対象とした。造成庭園は環境美化のうえから、また駐車場等の空き地を対象にしたのは、外来植物（帰化植物）が最も進入しやすい環境に置かれているからである。

4・調査方法

調査対象地が広範囲に渡るため、2013 年中に全域の植生の実態を把握し、調査事項を参考として、季節ごとに調査することとした。調査に当たっては「報告書」中の「残存緑地・調整池ビオトープ別高等植物確認種リスト」を精査し、記載の植物数を基準として追加種とすることにした。また、報告されている調査結果の検討にも触れることとし、外来植物（帰化植物）については実態を調査、目録化して総数をよく把握し繁殖力の強い種についての対策に役立てる事とした。

その他、工場敷地内の各所を保全するための用水路の状況にも目を配り、植物との相関関係にも目を配ることとした。種の同定に当たっては一部サンプルを持ちかえり検討を加え、参考までに標本の作製も行うこととした。

5・調査結果

調査結果については、各調査場所ごとに記述した。

I 調査結果

① 残存緑地

・自然公園の森

同地は下草が刈り取られ自然活動には相応しい状態が見られた。一部に残存のクワ畑があり、見事

なクワの大木があって、周辺一帯の地は養蚕が盛んであったことを物語る貴重な遺産の一つと見た。隣接する南側にシナノガキ 2 本を追加種とした。畑として使用している隣接地はスミレ類が多く、クラマゴケの群生箇所をみつけて追加種としたが、全体に整備されながらも植物環境が維持されているものと判断した。

・社員交流施設～針葉樹の森

社員交流施設入口付近にはカジノキの大木が 1 本ある。下部一帯に多数の小株が群れていたが、すっかり刈り取られてしまった。思うに周辺の集落では和紙を作っていたのだろうか、その名残として残して置きたい環境と見た。隣接しては植栽されてきたニセアカシアであるが、県内の里山でも一面に広がりを見せて在来種との共生が心配されている木である。その上トゲがあって始末の悪い植物である。また、マダケ林から地下茎をのぼして広葉樹林中に広がりをみせているが、そのまま放置しておくマダケ林となる心配があるので、この森を良好な環境として維持していくためにはいくつかの課題がある。

・東側一帯に延びる針葉樹の森

東側への道を下がるとスギ林の端に 1 本大きなサンショウの木がある。本種はトゲのないヤマアサクラザンショウで追加種とした。その下部一帯は平らな地で、ミョウガ畑の跡やシイタケのほだ木置き場となっていた。流路に沿ってオオブタクサが群生している。最終調査地点ではすっかり刈り取られていた。ここより沢に沿ってはスギ林となっている。両斜面はよく草が茂り、東斜面には多くの植物がみられる。ここには「報告書」p 19、表 5.1.4 移植実施種の生育確認状況によると、移植された植物が多いと記述されているが、エビネを除いては違和感を持たない状況とみた。現状ではエビネは開花期以降周辺の草が繁茂して草に覆われ生育に良好な環境とはいえない状態である。他、今回の調査で見つかったクサタチバナは、赤城山ではよくみられる植物であるが、植栽記録にみられないことから判断すると自生とみた。サンデンの森では唯一の生育箇所であり貴重な植物に加えて異論はない。本種も周辺が草に覆われ生育環境としては決して良好ではない。エビネは絶滅危惧種であり保全して増えていくことを望んでいる。ここ周辺一帯にあるオオバギボウシ、コバギボウシ、オクモミジハグマ、ヤマタツナミソウ、ノカンゾウ（ヤブカンゾウである）等は移植したものとあるが、現状では移植したもののようにみられない状態になっている。流路に沿ってはタマアジサイが群生し、周辺にはリョウメンシダ、ミヤマベニシダ、ベニシダ、オクマワラビ、ヤワラシダ等々のシダ類が多く、「シダの道」と名付けてもよい環境にある。エビネのある付近から道が上部へと通じている。道に沿って登るとオオタチツボスミレがあった。本種は日本海側の山地に多くみられるスミレで、赤城山麓で発見されたのは今回が初めてであり希少種に入りたい。ここより上部にかけてはイカリソウやスミレ類が多い。その一部に作業道が開かれているのをみた。丁度イカリソウの生えている箇所でもあった。この森一帯は、貴重な植物もあり、草々の生育がよく共存性にやや問題があって良好な環境としては心配の箇所でもある。

・サンデン社員の森

スギ林中のアズマネザサの刈り取りもあって、つぎつぎに下部に生えていた植物の芽生えや周辺からの植物の侵入もあって、ご苦労のあとがみられる林となっている。キンラン、ギンラン、ササバギンラン等も増えている状況がみられた。追加種としてはトウゴクシソバツナミを各所でみた。明るい環境の森として育ちつつある。林床に光が入り環境が良好となり改善が計られビナンカズラがみつ

かった。発見当初より個体数が増えつつある。まだ、一部にアズマネザサが茂っているが更に刈り取りが進められている現状をみた。なかに、アオスズランらしい植物をみついている。西側に広がるアカマツ林、コナラ林も多種の植物が生え良好な森となりつつある。

・ヒノキ林

ヒノキの森も整備されて大林沼へと続いている。沼のほとりに進むとセンブリの一群がみられた。2013年から本年秋にかけて観察したが激減している。原因の追及が急がれよう。多分周辺の木々が成長して日光不足によるものとみた。

・モミジの広場

スギ林を含むモミジの広場も段々に整備されて下層の植物にも変化がみられる。ここにはナンバンカラムシ、ワルナスビが目立つ。それなりの環境を維持しながら推移している。境界に接する観察路に沿ってのスギ林中に、スギを枯らすために根元から 60~70cm くらいのところにぐるっとノコギリを入れているのがみられる。子ども達を通りかかった際に倒れでもしたら大変な事故につながる。所有地でないが事故防止に努めたいとみた。

・ドングリの森

よく整備された良好な環境を有している。森の林床は明るくいろんな植物が見られる。スミレ類やトウゴクシソバツナミ等もみられ、良好な環境が維持されている森と判断した。ここより上部にかけては防風林の役割を果たしている。前半の緑地森林の一部を除いてほぼ良い環境が維持されているとみた。

② 東調整池ビオトープ

・東ビオトープ上部の北側の観察道付近にはアレチウリ、オオブタクサが多い。これ以上広がりを見せないうちに早急に対策が必要とみた。その下部の大側溝の両壁には栽植したキキョウが 100 株位はあるとみたが、草におおわれてかすかに花を確認できる程度であった。道の脇にはシロギキョウもみられ、所々にミソハギが確認できた。観察道に沿ってはツルマンネグサが広がっている。調整池の両法面はセイタカアワダチソウ、メマツヨイグサ、エゾノギシギシ、コセンダングサ、ヒメジョオン、オニウシノケグサ等の外来植物が多く、夏期には池端の観察道に入るのが容易ではなかった。池に沿ってのミソハギは開花によって多数を確認した。池の擁壁近くの東側法面周辺にオミナエシが 10 数本開花し、小株が多数広がりを見せていた。池北側のヤナギ類の生育は良好で、周辺のコウホネは極めて生育が良く群落を広げている。アサザ、ヒツジグサ類はヨシの影響を受けて減少している。調整池堰堤の外壁にはオオイタビが一面に着生し、一部は台風によって剝がれていたが段々に回復している。流水口両側付近に栽植されている樹木のラベルには誤りが目立ち、岩上にはヒメイタビがある。水路沿いのワサビは草におおわれ絶滅状態だった。全体として良好な環境を維持しているが、水中のアサザ、ヒツジグサは減少しつつある。

・西調整池ビオトープ

西調整池の両法面は安定を維持しているが草がよく茂っていた。上部のオオバヤシャブシの下部をみると小株が多数みられる。東調整池ビオトープよりも変化が少ないようにみた。水中のヨシ、ガマ群落はよく茂りエビモは姿を消している。

③ 造成森林

・北ゲート周辺

平坦箇所安定した森を形成しているが、植栽木が成長して良好な環境を維持してゆくには問題がある。

・物流加工センター横の造成林

平坦箇所植栽木をみるとシラカシ、コナラ、クリ、クヌギ、ケヤキ、イロハモミジ、サクラ、マユミ、ホオノキ、コブシ、シデコブシ、サザンカ、キンモクセイ等や低木類の混成林とみた。

④ 造成地等

平坦の箇所と切土面がある。平坦地については、工場周辺地が主であり環境美化上の問題がある。切土面については地面が金網で覆われている箇所もあって高木類の移植は無理と判断した。

⑤ 法面・造成林

全域に渡る法面緑化の状況を見る時、倒木が多くみられた。原因は造成法面の土の深さにあると判断した。法面を見る時その地が盛り土か切り取り面かで土の深さが異なる。法面の状態をみて適地適木を望みたい。

・構造物周辺とその他

森林の保全に欠かせないのが、構造物と植物の関係である。造成箇所の排水と必要なのが明渠と暗渠の両工法がある。側溝すぐ脇に木が植えられている。また、暗渠排水溝上に植えられているものもあり、構造物が破壊される心配がある。

・通路際の植樹

シラカシが通路際に植えられているが、樹冠が広がって見透しが悪く成っている。

⑥ その他

・風致林としての庭園「こもれ日の森」

工場入口周辺の植え込みはよく生かされて美観を呈している。東入口近くの道下にオオムラサキ（ツツジ）が植えられているが、その脇にスギが植えられ日陰となり全く開花がみられなかった。通路に沿っては樹種を選んで植えると美化と環境の両面に役立つとみた。

6. 平成 13 年の報告書にみる誤認植物と問題の植物

全域に渡っての調査であるため、2013 年の報告書を参照して現地の植物を検索してみた結果いくつかの誤認種があった。

・イタビカズラ クワ科

東調整池堤に壁一面に着生しているものにイタビカズラとラベルがついているが、検索したところオオイタビであった。イタビカズラは高崎市以南で自生がみられる。富岡市、藤岡市、東毛方面にある。オオイタビは群馬県では自生はみられない。千葉県以西の暖地性の植物である。

・オオバヤシャブシ カバノキ科

本種が法面に多数植栽されている。やせ地でもよく育ち法面の安定に相応しい木で、各地で砂防緑化樹として植えられてきた。そのために導入したもので本来の役割を十分に果たしてきたことは事実である。この木の自生地は太平洋側の海岸近くの山地や丘陵地に分布するもので安易に苗木の供給が可能のために導入されたものであろう。群馬県には自生しない植物であり、植栽数が非常に多い。

・ヤマザクラ バラ科

ヤマザクラとラベルが付いているが、残地緑地を調べてみたがヤマザクラは見当たらなかった。県

内の分布は極めて少なく、今までに確認しているのは前橋市橋山と高崎市観音山の2箇所のみである。開花期に差があるため容易ではない。また高木のためサンプルの確保に苦労した。栽植にもヤマザクラのラベルがみられたが疑問である。

- ・ミツバツツジ ツツジ科

本県に自生するミツバツツジの仲間には、ミツバツツジとトウゴクミツバツツジの2種がある。東Bioトープのミツバツツジ表示のものはコバノミツバツツジであり、静岡県以西に自生するものである。

- ・ノカンゾウ ユリ科

報告書にも開花を確認としてあるが、ヤブカンゾウである。

その他、ラベルの付け違いが多くみられた。

7. 記載もれ、追加種

記載もれの植物が多くみられる。植栽木等は目録中に一部、栽植、栽植?等の記述が備考欄にあるが、その他に記載もれが多数みられる。

離弁花類

ヤマモモ科	ヤマモモ
ヤナギ科	ヤマナラシ ドロノキ
カバノキ科	ミズメ ケヤマハンノキ シラカンバ
ブナ科	ブナ アラカシ イチイガシ スタジイ ツブラジイ マテバシイ
ニレ科	ムクノキ
クワ科	コウゾ カジノキ オニイタビ
タデ科	ツルドクダミ
ナデシコ科	ツメクサ
モクレン科	モクレン ハクモクレン シデコブシ
マツブサ科	サネカズラ
カツラ科	カツラ
キンポウゲ科	ボタンズル オオバショリマ ヤマトリカブト×カワ チブシ (雑種)
アケビ科	ゴヨウアケビ
ツバキ科	ナツツバキ

アブラナ科

マンサク科

ベンケイソウ科

ユキノシタ科

バラ科

マメ科

カタバミ科

フウロソウ科

トウダイゲサ科

ミカン科

カエデ科

ニシキギ科

スマレ科

ミソハギ科

ヤブツバキ

サザンカ

ヒサカキ

イヌガラシ

マルバマンサク

ヒュウガミズキ

ツルマンネングサ

ヒメウツギ

カスミザクラ

オオヤマザクラ

シダレザクラ

ナナカマド

カナメモチ

コデマリ

ビワ

イタチハギ

キダチコマツナギ

エゾタチカタバミ

オランダフウロ

コミカンソウ

オオニシキソウ

ナンキンハゼ

ヤマアサクラザンショウ

オオモミジ

コミネカエデ

オニツルウメモドキ

エイザンスミレ

ビオラ・パピリオナケア

ビオラ・フレックス

サルスベリ

アカバナ科	ユウゲショウ	キキョウ科	ヤマホタルブクロ
ミズキ科	アオキ		キキョウ
	アマノガワアオキ		シロギキョウ
	ハナイカダ	キク科	チチコグサ
	ヤマボウシ		カワラヨモギ
	アオヤマボウシ		ブタナ
	サンシュユ		センダングサ
ウコギ科	カクレミノ		ノアザミ
セリ科	セントウソウ		アラゲハンゴンソウ
イチヤクソウ科	ギンリョウソウ		セイヨウタンポポ×カント
合弁花類			ウタンポポ (雑種)
ツツジ科	オオムラサキ	単子葉植物	
	アカヤシオ	ユリ科	ワニグチソウ
	シロヤシオ	アヤメ科	キショウブ
	ドウダンツツジ	イネ科	ホソバナガハグサ
	サラサドウダン		コツブキンエノコロ
	コバノミツバツツジ		ムラサキエノコロ
カキノキ科	シナノガキ		ニセアゼガヤ
	ハチヤガキ		ウシノシッペイ
ガガイモ科	ガガイモ		タイヌビエ
	クサタチバナ		コクマイザサ
ヒルガオ科	ネナシカズラ	カヤツリグサ科	コゴメガヤツリ
クマツヅラ科	コムラサキ		アゼガヤツリ
シソ科	ヤマトウバナ		ヒメヒラテンツキ
	カメバヒキオコシ		ヒメクグ
	トウゴクシソバタツナミ	ラン科	アオスズラン
ノウゼンカズラ科	キササゲ		
スイカズラ科	コバノガマズミ		
	ハナツクバネウツギ	総科数	59科
オミナエシ科	オミナエシ	新に追加した科数	9科
			135種

※ 新たに追加した科数

シダ植物 イワヒバ科

裸子植物 イチョウ科、イチイ科、コウヤマキ科

離弁花類 ヤマモモ科、マツブサ科、カツラ科、ツバキ科

単子葉植物 アヤメ科

II. 目録 (2) 木漏れ日の森周辺の草本植、庭園木目録

種子植物

離弁花類

アブラナ科	オランダガラシ	ガマ科	ヒメガマ
シダ植物		・カヤツリグサ科	カンガレイ
トクサ科	・トクサ	サトイモ科	セキショウ
単子葉植物		・ラン科	シラン
ユリ科	タカサゴユリ		
アヤメ科	・ハナショウブ		
		8科 8種	

庭園木

裸子植物

イチイ科	・イチイ ・キャラボク		・イチイガシ シラカシ
マツ科	クロマツ ・ドイツトウヒ ・メタセコイア	ニレ科	ケヤキ
ヒノキ科	ヒノキ	モクレン科	・ハクモクレン コブシ
双子葉植物		カツラ科	・カツラ
離弁花類		ツバキ科	・ナツツバキ
ヤナギ科	バッコヤナギ	オトギリソウ科	・ビヨウヤナギ
カバノキ科	ケヤマハンノキ	マンサク科	・マルバマンサク ・ヒュウガミズキ
ブナ科	・オーク クヌギ ・ウバメガシ ・アラカシ	バラ科	ヤマブキ ・ウメ ・シダレザクラ ・オオヤマザクラ ・アマノガワアオキ
マメ科	マルバハギ ネムノキ	合弁花類	
トウダイグサ科	・ナンキンハゼ	リョウブ科	リョウブ
カエデ科	イロハモミジ	ツツジ科	・オオムラサキ

カエデ科	コハウチワカエデ
トチノキ科	・セイヨウトチノキ
モチノキ科	モチノキ
	アオハダ
アオイ科	・ムクゲ
ミソハギ科	・サルスベリ
ミズキ科	・ヤマボウシ
	・ハナミズキ
	アオキ

・印は、目録に追加の植物

	・シロヤシオ
	・コバノミツバツツジ
	・シロヤシオ
	・アセビ
	・セイヨウシャクナゲ
	・ドウダンツツジ
カキノキ科	・カキノキ
エゴノキ科	・エゴノキ
モクセイ科	・キンモクセイ
スイカズラ科	・サンゴジュ
	・ハナヅノツクバネウツギ

28科 53種

※. 草本植物	8科	8種
庭園木	28科	53種
計	36科	61種

3. 調査結果

調査池の草本植物、庭園木数の合計は 36 科、61 種であり、・印の植物は残存緑地・調整池ビオトープ別高等植物確認種リストに未掲載の植物である。

植栽の植物を見ると、植物名プレートのかげ違い、誤った表示が見られた。また、プレートが木の生育に伴って、破損しているものがみられた。

その他、記念樹に植物名が表示していないものがあるのに気付いた。設置されているベンチが腐食しているものもみられた。

Ⅲ（１）外来植物（帰化植物）モニタリング調査

近年生物多様性の保全が重要な問題となっている。なかには生態系等に被害を及ぼしその害を防止することが求められている。本県においても外来植物チェックリストを作成して対策を講じているところである。サンデンフォレストも開発後 20 余年が経過している。

開発当時より帰化植物数が増加していることは確かな事実である。報告書には、調整池ビオトープ法面の外来種対策が中心課題としての記述が見られる。今回のモニタリング調査においては工場全域に渡って目をどうしてみた。目録中より外来種を抽出して目録化し基準とし、追加種を含めて目録を作成した。今後はその増減をみながら繁殖力の強い植物に焦点をあてながら防止対策をする必要のあることを感じとった。報告書にも既に指摘してあるとおり造成域に多いことは確かであるが、全域に渡って広がりが見られる。調査の対象地点においては、残存森林内の水路の設置箇所、それに伴う堰堤の周辺一帯、傾斜地（法面）、駐車場を含めた平坦地、ビオトープ周辺一帯等を調査対象とした。群落を形成している植物にはオオブタクサ、アレチウリ、ワルナスビ等があるが防止対策を必要としている。また、繁殖を

ひろげつつある植物にはセイタカアワダチソウ、ナンバンカラムシがあげられる。すでにオオブタクサについては夏期に刈り取っていることを確認している

1. 調査場所（メッシュで示した）

・ E、G-1.2、森の教室管理棟一帯の広場

西側の樹林帯に接している箇所には、県絶滅危惧Ⅰ類のウシクサが生えている。この種は湿地開発、土地造成、自然遷移等によって県内全域に渡って生育地がなくなって来ている。県の調査結果を見ても分かるように全域に現存地の確認がされていないことが記述されている。確認地としてはサンデンフォレストが唯一で、調査の結果では100株余を確認し標本も作成した。この広場の外来種をみると平坦地としては比較的種類が少ない。現在ヤギの放し飼いがされているので他地に移動し保護に努めることが望まれよう。保存には万全を期すことが望ましく、個体数の増加を期待するところである。ここにはセイヨウタンポポが多く、ニホンタンポポとの雑種もある。北側法面にはワルナスビが広がりつつあるのが心配である。

・ B、C、D、E-2.3、C、D、E-3.4.5、駐車場を含む一帯

駐車場一帯は、駐車によって踏み潰されて外来種の侵入が阻止されている。駐車していない箇所には外来種が見られる。特に北側の空き地、及び東西に延びる法面にはワルナスビやセイタカアワダチソウ、アラゲハンゴンソウ等が目立っている。

・ E、F-2.3、

堰堤部の内側にはアレチウリが繁茂している。この草に覆われた下部の植物は生育不能となり枯れたりして被害が出ている。また、アレチウリは果実が成熟すると沢山の長いトゲを形成するので始末の悪い植物として嫌われている。早い内に抜き取ることが望ましい。

・ B-3.4.5、残存森林内の水路設置による切り開き箇所

ここ一帯はミョウガ畑の跡、シイタケのほだ木置き場跡等に接し、水路設置で切り開かれた平らな場所にはオオブタクサが繁茂し群落をなしている。下部に向かって連続はしていないが、造成した大きな側溝部では広がりをみせている。対策をして刈り払いをしているが更に広がるのが心配である。

・ B、C-6.7.8、東調整池周辺

B-6、東調整池北西部の側溝にはオオブタクサ、アレチウリが多い。散策路を南へC-8部分の路沿いにはツルマンネングサが広がりをみせている。調整池内面の法面にはワルナスビが広がっている。

・ H、I-3.4.5、物流加工センター西側

散策路沿いにワルナスビがみられ、ナンバンカラムシが周辺に多数見られる。

・ C、D、E-5.6、北側の法面

ワルナスビが多い。

・ C、H-9. 10、コンプレッサー部品工場西側

ワルナスビが多い。

2. 調査結果

全域を通してワルナスビの広がりが対策を含めて課題である。ワルナスビは現状では全域に広がりがなく、部分的なので早期防止対策をして絶滅させたいものである。今回のモニタリング調査によって15種を追加種として挙げた。

残存森林内には比較的に入来種が少ない。特に工場西側では諸団体による奉仕活動によって安定した森が形成されている。

Ⅲ (2) 外来 (帰化) 植物目録

裸子植物		カタバミ科	ハナカタバミ
マツ科	・ドイツトウヒ		ムラサキカタバミ
スギ科	・アケボノスギ		オッタチカタバミ
種子植物		フウロソウ科	アメリカフウロ
双子葉植物			・オランダフウロ
離弁花類		トウダイグサ科	コニシキソウ
ブナ科	・オーク		・オオニシキソウ
イラクサ科	ナンバンカラムシ		・ナンキンハゼ
タデ科	ナガバギシギシ	スマレ科	・ビオラ・パピリオナケア
	エゾギシギシ		・ビオラ・フレックス
	・ツルドクダミ	アオイ科	イチビ
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	ウリ科	アレチウリ
ナデシコ科	オランダミミナグサ	アカバナ科	メマツヨイグサ
	ムシトリナデシコ		・ユウゲショウ
アカザ科	ケアリタソウ	合弁花類	
	コアカザ	ヒルガオ科	マルバルコウソウ
ヒユ科	ホソアオゲイトウ		マルバアメリカアサガオ
アブラナ科	セイヨウアブラナ	シソ科	ヒメオドリコソウ
	オランダガラシ	ナス科	アメリカイヌホウズキ
	ショカツサイ		ワルナスビ
バラ科	オキジムシロ		テリミノイヌホウズキ
・ベンケイソウ科	・ツルマンネングサ	ゴマノバグサ科	タチイヌノフグリ
マメ科	ゲンゲ		オオイヌノフグリ
	ムラサキウマゴヤシ	・ノウゼンカズラ科	・キササゲ
	・キダチコマツナギ	キク科	ブタクサ
	ニセアカシア		オオブタクサ
	ムラサキツメクサ		アメリカセンダングサ
	シロツメクサ		・センダングサ

コセンダングサ
 シロバナセンダングサ
 オオアレチノギク
 ハルシャギク
 ベニバナボロギク
 ダンドボロギク
 ヒメムカシヨモギ
 ハルジオン
 ハキダメギク
 ・コゴメギク
 チチコグサモドキ
 イヌキクイモ
 オオハンゴンソウ
 アラゲハンゴンソウ
 ノボロギク
 セイタカアワダチソウ
 オオアワダチソウ
 ヒメジョオン
 セイヨウタンポポ
 アカミタンポポ
 ・セイヨウタンポポ×
 カントウタンポポ (雑種)
 ・ブタナ

メリケンカルカヤ
 カラスムギ
 イヌムギ
 ジュズダマ
 カモガヤ
 ・ニセアゼガヤ
 オニウシノケグサ
 ヒロハウシノケグサ
 オオウシノケグサ
 ネズミホソムギ
 ネズミムギ
 ホソムギ
 オオクサキビ
 シマスズメノヒエ
 オオアワガエリ
 ナガハグサ
 セイバンモロコシ
 ナギナタガヤ

合計 30 科 96 種

単子葉植物

ユリ科

・アヤメ科

ヒメアオイ科

イネ科

タカサゴユリ

・キシノウブ

ホテイアオイ

・マダケ

・モウソウチク

・印は新たに追加した科数と種数

3 科 21 種

シダ植物		イラクサ科	ムカゴイラクサ
イノモトソウ科	セフリイノモトソウ		ヤブマオ
ホシダ科	ホソバナライシダ		メヤブマオ
	ヤブソテツ		コアカソ
	ヤマヤブソテツ	タデ科	ツルドクダミ
	ヤマイタチシダ		オオイヌタデ
	ベニシダ		ナガバギシギシ
	オオベニシダ	ザクロソウ科	ザクロソウ
	オクマワラビ	ナデシコ科	ツメクサ
	アイノコクマワラビ		コハコベ
	アスカイノデ	ヒユ科	イノコズチ
	ミウライノデ	キンポウゲ科	ヤマトリカブト×カワチ
	サカゲイワシロイノデ		ブシ (雑種)
	イワシロイノデ	アブラナ科	イヌガラシ
ヒメシダ科	ミゾシタ	バラ科	キンミズヒキ
	ヤワラシダ		ミツバツチグリ
	ミドリヒメワラビ		ウワミズザクラ
	ハリガネワラビ		イヌザクラ
	アオハリガネワラビ	マメ科	シロツメグサ
イワデンダ科	ホソバイヌワラビ		ヤハズソウ
	ヤマアイヌワラビ		マルバヤハズソウ
	ヒロハヘビノネゴザ		メドハギ
	フモトシダ		ヌスビトハギ
	セイタカフモトシケシダ	カタバミ科	エゾタチカタバミ
	ヌリワラビ		オッタチカタバミ
被子植物		フウロソウ科	オランダフウロ
双子葉植物		トウダイグサ科	オオニシキソウ
離弁花類			コミカンソウ
ヤナギ科	ヤマナラシ	ミカン科	ヤマアサクラザンショウ
カバノキ科	オオバヤシャブシ	カエデ科	コミネカエデ
ブナ科	コナラ	スマレ科	オオタチツボスミレ
	クヌギ		ヒメスミレ
	シラカシ	ウリ科	アレチウリ
クワ科	ヒメイタビ	アカバナ科	ユウゲショウ
	オオイタビ	ミズキ科	ヤマボウシ
	ヤマグワ		アオヤマボウシ
	ナンバンカラムシ	ウコギ科	ヤマウコギ

合弁花類		ヤマノイモ科	タチドコロ
ツツジ科	コバノミツツツジ	イグサ科	ホソバナガハグサ
ガガイモ科	ガガイモ		スズメノヤリ
	クサタチバナ	イネ科	オニウシノケグサ
シソ科	ヒメジソ		ホソムギ
	イヌトウバナ		ニセアゼガヤ
	ヤマタツナミソウ		ニワホコリ
ナス科	アメリカイヌホウズキ		ウシノシッペ
リンドウ科	センブリ		イチゴツナギ
キク科	カワラヨモギ		ウスゲアキメシバ
	オオハンゴンソウ		ウシクサ
	アラゲハンゴンソウ		メリケンカルガヤ
	ヒヨドリバナ		コツブキンエノコロ
	ブタナ		タイヌビエ
	チチコグサ	カヤツリグサ科	アオイトスゲ
	アキノノゲシ		ヒメクグ
単子葉植物			ヒメヒラテンツキ
ユリ科	チゴユリ		アゼガヤツリ
	ワニグチソウ		

※. 総数 38 科 104 種